

## 子宮頸がん検診における受診間隔が異なる受診者の現状 ～特に若齢者について～

○野口 真貴<sup>1)</sup>、羽野 健汰<sup>1)</sup>、佐藤 奈美<sup>1)</sup>、栗田和香子<sup>1)</sup>、佐藤美賀子<sup>1)</sup>、  
神尾 淳子<sup>1)</sup>、菅野 薫<sup>1)</sup>、森村 豊<sup>2)</sup>、渡辺 尚文<sup>3)</sup>、藤森 敬也<sup>3)</sup>

1) 公益財団法人福島県保健衛生協会、2) 埼玉医療生活協同組合羽生総合病院、  
3) 公立大学法人福島県立医科大学医学部

【目的】子宮頸がん検診は、平成16年に国の指針により2年に1回の受診とする隔年検診が開始され、福島県でも多くの自治体が逐年検診から隔年検診へと移行した。子宮がん罹患率は若齢者で増加傾向にあり、検診による早期発見・早期治療が重要である。今回、受診間隔が異なる若齢者の現状を知ることを目的とした。

【対象】福島県内の20歳～44歳で、平成21～27年度に実施した隔年検診受診者（以下、隔年）延べ146,997人と逐年検診受診者（以下、逐年）延べ30,670人を対象とした。

【方法】隔年・逐年別に検診初回受診者数（過去3年間検診未受診者含）、要精検者数、CIN3以上の子宮頸部治療病変数を比較検討した。さらに、CIN3以上例については検診受診歴の有無を比較した。統計学的検討は $\chi^2$ 検定を用い、 $p < 0.05$ をもって有意差ありとした。

### 【結果】

- 1) 検診初回受診者は、隔年90,045人（61.3%）、逐年13,002人（42.4%）であり、隔年で有意に高かった（ $p < 0.0001$ ）。
- 2) 要精検者数は、隔年2,746人（1.87%）、逐年501人（1.63%）で、隔年が有意に高かった（ $p = 0.005$ ）。
- 3) CIN3以上の子宮頸部治療病変数は、隔年538人（0.37%）、逐年97人（0.32%）であり有意差はなかった（ $p = 0.208$ ）。
- 4) 子宮がんを含むCIN3以上例の受診歴無しは、隔年538人中402人（74.7%）、逐年97人中65人（67.0%）で、隔年・逐年共に受診歴無しから発見される割合が高かった。

【まとめ】隔年検診の若齢者では逐年検診に比べ初回受診者が多く、要精検者数も多くみられた。一方、CIN3、子宮がん例の多くは検診実施形態に関わらず受診歴の無い者から発見された。女性の妊孕性の観点からも、検診により前癌病変の時期に発見することが重要であるので、若齢者に対する検診機会を増やし、いつでも受診できる体制作りが必要と考える。